

(11) 菅 康弘 ビワ果実腐敗に関与する菌類の感染時期 Suga, Y.: Infection Period of Causal Fungi of Loquat Fruit Rot 筆者らは2005年～2007年にかけて、*Colletotrichum* 属、*Pestalotiopsis* 属等の各種菌類によるハウスビワの果実腐敗に天井部ビニルの被覆開始時期の早晚が密接に関連することを明らかにした。ここでは、露地ビワも含めて薬剤防除の適期をより明確にするため、各種菌類が果実へ感染する時期をポット栽培ビワ樹を用いて調べた。すなわち、露地で育成したポット植えの品種「涼風」を、順次ハウス内に持ち込み収穫時に腐敗果を計数したところ、出蕾期に搬入した区では腐敗果の発生は認められなかったが、開花期に搬入した区では腐敗果率6.1%を示した。また、落弁期に搬入した区の腐敗果率は11.1%で無処理の11.5%とほぼ同等の値を示した。一方、品種「陽玉」を予めハウス内に持ち込み順次露地に搬出した試験では、全期間露地に置いた区の腐敗果率11.6%に対し、落弁終期に露地に搬出した区では腐敗果率3.4%を示し、幼果期に搬出した区では腐敗果の発生が認められなかった。以上より、ビワ果実腐敗に関与する各種菌類は、主に開花期から落弁期までの期間に感染していると推察された。(長崎果樹試)

(12) 田代暢哉・井手洋一・善正二郎 夏季高温期のハウスミカン園におけるカンキツ緑かび病の発生 Tashiro, N., Ide, Y. and Zen, S.: Occurrence of Green Mold Caused by *Penicillium digitatum* in Plastic Green House Mandarin in the High Temperature Period of Summer カンキツ緑かび病は秋～冬季にかけて樹上および貯蔵中の果実に発生する。一方、発病に適した成熟果実が存在しない晩春～夏季にかけての露地条件下では、土壌表面および土壌中で胞子の状態で生存し、越夏するとされている(倉本, 1979)が、ハウスミカン園での発病実態は不明であった。今回、夏季高温期のハウスミカン園で発生状況を調査したところ、果実の成熟が進んだ7月上旬から発病が始まり、収穫期の8月下旬まで増加した。発生は集中分布する傾向にあった( $Id = 9.9$ )。ハウス内での胞子飛散は発病時には既に認められ、8月中旬には1シャーレ(径9cm)あたり5分間開放で約20個のコロニーが形成された。ハウス内の成熟果実に胞子を有傷接種したところ、最高気温が40°Cを超えるような条件下でも発病し、果実表面には大量の胞子が形成された。以上のように、高温のため発病には不適であるとこれまで考えられていたハウスミカン園でも本病は発生し、胞子が飛散していることから、ハウスミカン園は初秋季における本病の重要な伝染源になっていることが示唆された。(佐賀上場営農セ・\*佐賀果樹試)

(13) 梶谷裕二・景山幸二\* *Pythium myriotylum* によるネメシア立枯病(新称) Kajitani, Y. and Kageyama, K.: Occurrence of Damping-off of *Nemesia* Caused by *Pythium myriotylum* 2006年、県内のネメシア苗生産農家において、茎の地際部が褐変し、株全体が萎ちょうする被害が発生した。常法により病斑部から菌を分離したところ、*Pythium* 属菌と思われる菌株が高率に分離された。本菌はPDA培地上で放射状の菌そうを示した。胞子のうは膨状～耳たぶ状で、蔵精器は蔵卵器に4～6個付着し、異菌糸性、蔵卵器は平滑で大きさは26-33  $\mu\text{m}$  (平均28.4  $\mu\text{m}$ )であった。卵胞子は非充満性で大きさは19-27  $\mu\text{m}$  (平均22.1  $\mu\text{m}$ )であった。これらの形態的特徴から、本菌を *P. myriotylum* と同定した。また、分離菌のrDNA-ITS領域の塩基配列を解析した結果、既報の *P. myriotylum* 3菌株と塩基配列が100%一致した。本菌の生育可能温度範囲は10°C～40°C、生育適温は35°Cであった。分離菌を健全なポット苗に接種したところ、10株中4株で病徴が再現され、病斑部からは接種菌が高率に再分離された。以上の結果から、本菌を *P. myriotylum* と同定した。本菌によるネメシアの病害は未報告であることから、ネメシア立枯病(英名: Damping-off)と呼ぶことを提案する。(福岡農総試・\*岐阜大流域研セ)

(14) 小川哲治・佐山 充・平田憲二 ジャガイモ疫病防除のためのマンゼブ剤に数種展着剤を加用した場合の耐雨性への影響 Ogawa, T., Sayama, M. and Hirata, K.: Influence that Addition of Several Spreaders Gives to Rain-fastness of Mancozeb for Potato Late Blight Control 演者らはジャガイモ疫病に対する防除薬剤の効率的な使用法を開発するために、各種薬剤の耐雨性を評価してきた(小川ら, 2006)。供試した薬剤の中でマンゼブ水和剤(商品名: ジマンドイセン水和剤)は、安価であるが他の薬剤と比較して耐雨性が低かった。そこでマンゼブ水和剤の耐雨性を向上させることを目的に、数種展着剤の加用がマンゼブ水和剤の耐雨性へ与える影響を調査した。試験は直径10.5cmのポリポットに栽培したジャガイモの茎葉に、各種展着剤を加用した常用の1/2濃度のマンゼブ水和剤を散布後、人工降雨処理(累積降雨量100mm, 200mm)を行い、ジャガイモ疫病菌を接種後、発病程度を調査し、算出された防除価によって評価した。その結果、固着性展着剤であるベタンVを加用した場合の防除価(200mm試験区の防除価: 83.6)は、無加用(同: 57.6)と比較して高く、耐雨性の向上効果が認められた。一方、新グラミン、アブローチBI、スカッシュおよびミックスパワーを加用した場合の防除価は、無加用の場合と有意な差がなく、耐雨性の向上効果は認められなかった。(長崎総農林試愛野・\*現: 北農研)